

## 洗い屋 今江清造氏

1930(昭和5)年京都生まれ。25歳で叔父の営む洗工店に勤める。1971(昭和46)年に今江洗工所の代表となり、株式会社イマエに改称。京都御所給御門・日本記念館ロクフレアー財団(ライデルフイア)の茶室など多数の洗いを手掛け、1991(平成3)年「現代の名工」(京都府塗装工業協同組合主催)受賞。現在は取締役会長。また山伏として波切不動院(京都市左京区)の住職を務めるという二面も持つ。

# 伝統建築の渋み深みを裏で支える 「洗い屋」の見極め力

「洗い屋」は、柱や梁、天井、建具などの古材の汚れを洗い流し、木肌の美しさを蘇らせる仕事です。長く豊かな木造建築の歴史を持つのが国で、その技術は寺社や町家の維持再生に重用され、大きな役割を果たしてきました。木造の耐久性や時を経た木の質感や趣が再評価される中で、古都京都を中心に数々の名建築の洗いを手がけた名工、今江清造氏に木造の美しさを蘇らせる技の一端を語っていただきました。

### 遅いスタートをバネに 仕事の深みを探り 経験を積み上げる

今江さんが古材の汚れを洗い流す「洗い屋」の家業を継いだのは25歳。遅いスタートでした。職人仲間には皆自分より年下。仕事のイロハを今さら「教えてくれ」と言えず、ただ先輩の仕事振りを見て、真似て、覚える日が続き

身につかない技能です。

汚れを浮かせるための薬剤も、江戸時代はアルカリ性の液体「灰汁(あく)」「糶」を使いましたが、明治のころからは、強アルカリ性で劇薬の「苛性ソーダ」<sup>※1</sup>が多く使われるようになりました。強アルカリ性のため、濃過ぎると木肌を傷める危険があります。

微妙に変わる条件の中、濃度調節は熟練した職人でも難しく、危ない作業です。例えば台湾ヒノキは元が白ではないので、いくら高濃度の薬品で洗っても白くなりません。温暖な気候で育った南洋材は目が粗く、色も浅黒いのが特徴です。素材の元の木肌を一瞬で見抜き、美しさを引き出すような適度な濃度がわかるようになるには、素材を見極める目を養うことが大切だと今江さんは語ります。

※1 灰汁：植物を燃やす際に出る灰を水に浸して得る、上澄み液。  
※2 苛性ソーダ：水酸化ナトリウムのこと。石鹸作りに欠かせない薬品。毒物及び劇物取締法により劇物に指定。



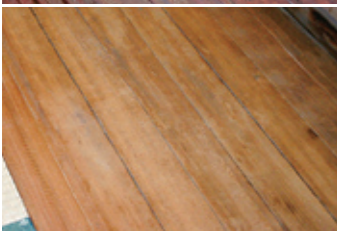
薬品の濃度は素材を見てから現場で調整。



薬品を染み込ませる「琉球(りゅうきゅう)」という井草の箒。



写真上／稲穂で編んだ藁箒でたっぷり木材に水を含ませる。  
写真下／木目に沿って「ささら」の角度を調節し、汚れを浮か立たせる。



写真上／洗浄前。長年の汚れやドロ、油などが染み込み、黒く変色した床。  
写真中／洗浄中。汚れは変色した泡となって表面に浮き出してくる。  
写真下／洗浄後。美しい白木の木目を取り戻した床。



洗い屋の力量が問われる道具「ささら」で、木目に蓄積した汚れをかきだす。(築80余年の京都の町家で)

### スギは女性、 マツは男性の肌のように 素材を見極めて洗う

洗いは、まず薬品を浸透させるため、稲穂で編んだ藁箒(わらぼうき)を使って水をたっぷり木材に含ませます。水が乾く前に、適度な濃度の薬品を井草の箒で染み込ませていきます。「ヒノキやスギは女性の肌のように軟らかい木なので薬品は薄く、逆にトガやマツなどは男性のように硬い木なので、少し薬品の濃度を濃くしないといけない」。

使用する道具もすべて手作りです。「道具を見れば力量が分かる」とさるれ、特に木目の奥に溜まった汚れをかき出す「ささら」は若竹の真皮を割いて作り、竹の繊細な腰がバネとなって

汚れを浮か立たせます。木目の奥深い汚れは「ささら」を立てて、浅い汚れは寝かせて洗い、硬い木は力を入れ、軟らかい木はなでるように優しく、微妙な角度と力加減は、古材を見極める職人だけがなせる熟練の業です。

### 町家では 施主様に学ぶことも 洗いは家を維持する文化

今江さんは「自分の仕事に自信が持てたのは50歳近くになってから」と言われます。京都の今宮神社、白峯神宮など神社仏閣や、祇園の町家を主な舞台に仕事を請け続けました。今江さんの洗いの美しさが評判となり、特に祇園の茶屋からは2年に一度くらいペースで洗いの依頼が入りました。町

ました。遅いスタートに打ち勝つ意地が情けない自分を支えました。人より早く現場に行き、覚えたことは繰り返し、できるようなった仕事は丁寧で、確実にこなす。作業の中に常に「なぜ？」を持ち込んで仕事の深みを探り、黙々と経験を積み上げていきました。

### 百の現場に合う 百の洗い方を 職人の腕が判断する

京都には寺社、屋敷、茶屋、町家など伝統的な木造建築が数多くあります。洗いは、水や薬品を用いて洗い流すという手間がかからないように見える作業ですが、木の種類や産地、状態、建物の用途や場所によって洗い方を変えていくので、百の現場には、百の洗い方があります。現場の状態を判断し、最適な洗い方を選択。そこに職人の腕が問われます。多くの現場を踏まないと

家のご主人から逆に素材の扱い方を教わることもあります。新築のマツの舞台を日本酒で磨く方法もその一つです。古都には素材を生かして家を長持ちさせる知恵が根付いています。家を維持する手入れの文化を引き継いできたのが「洗い屋」だといえます。

### 温故知新を信条に 次の世代へ 洗いの技を引き継ぐ

今江さんの洗った建物を見た人はその美しさに驚きます。その評価が広がる中、1991(平成3)年には現代の名工に選ばれました。「洗いの職人は年々減りつつありますが、洗いの技術はこれからの時代にも必要」と話す今江さん。木材は手を掛ければ、何度でも美しく蘇ります。サステイナブルが叫ばれる時代に、日本ならではの技術が残され、若い世代に引き継がれることを今江さんは願っています。



美しい白木を取り戻した床により室内空間は明るい印象に。



今江さんが長年愛用してきた桶と「藁箒」(左)と「ささら」(右)。